

## 文化的特性としての「面子」への初歩的理解：「面子」の理論研究を中心に

劉，梓晨  
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻：修士課程

<https://doi.org/10.15017/7162253>

---

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 26, pp.17-36, 2023-09-30. 九州大学大学院人間環境学府教育社会学研究室  
バージョン：  
権利関係：

## 文化的特性としての「面子」への初歩的理解

### —「面子」の理論研究を中心に—

A Rudimentary Understanding of "Face" as a Cultural Feature—Focusing on Theoretical Studies of "Face"

劉梓晨

#### 1. 問題の所在：なぜ「面子」に注目するのか。

中国人の日常生活では、「臉」と「面」に関することわざを頻繁に耳にする。例えば、「死要面子活受罪」（体面を保つために無駄に苦しむ）、「人要臉樹要皮」（木に皮が必要なように、人にはプライドが必要である）、「打腫臉充胖子」（見栄を張るために無理をする）などである。また、「面子」という言葉を直接指すものではないが、「面子」の意味を含むことわざもある。例えば、「宁為玉碎，不為瓦全」（瓦全よりは玉碎を選ぶ；名誉や忠義を重んじていさぎよく死ぬこと）などである。

これらのことわざから、人が「面子」を重視することは時に非合理的と見なされることもあるが、時には名誉の維持として賞賛されることもあることがわかる。「面子」にはポジティブな側面とネガティブな側面が存在するが、人にとってその重要性はいうまでもない。

ただし、「面子」は個々人が単独で作り出したものではなく、社会的相互作用の中で形成されるものである。社会的相互作用において、自己イメージの管理や名誉・評判の維持に努め、常に他者からどのように評価されているかに注意を払う

(Goffman,1955)。他者が自分に与えるこのような社会的承認は、「面子」として表現される。「面子」は、私たちの日常生活に深く根ざしており、日々の人間関係や社会関係の構築に重要な役割を果たして

いる。特に中国社会では、「面子」が極めて重要な地位を占めている（魯迅,2005;林語堂,1994）。

私たちは社会的相互作用の中で、自分自身や他人の「面子」に気を配ることは多いが、「面子」という言葉を頻繁に口にするのはあまりない。これは「面子」が行動規範として潜在的に存在しているためである。「面子」の文化が深く浸透している中国社会では、中国人は生まれた時から自国の文化に浸かっているため、自分の心理・行動パターンを意識しない可能性が高いと言えよう。したがって、「面子」の概念を再検討し、その影響下での心理・行動パターンを再理解する必要がある。

「面子」の概念は中国文化に由来するが、その理論と実践は国境を越えて広まり、異なる文化的背景を持つ学者たちにより研究されている。1940年代から、胡先晋、Goffman、何友輝、金耀基といった学者は「面子」の理論研究を行い、「面子」を理解するための有意義な研究成果を生み出してきた。彼らの研究により、「面子」の複雑な構造とその機能が明らかにされ、「面子」を理解することは中国人の心理・行動パターン、さらには中国社会を理解する鍵となっていると言えよう。

#### 2. 先行研究の整理：「面子」の歴史的背景—心理的原動力と儒教的根源から近代の視点まで

##### 2.1 「面子」の心理的原動力

伝統的な中国社会は農耕社会であり、小農経済が主

流の経済形態を形成しており、土地が移動不可能であり、生産用具が後進的であったこと、生産と消費が自給自足であったことから、人々は個々の家族という安定した基本単位に分散して生活するようになった。こうした農耕社会の特徴は、中国人の経済生活だけでなく、中国人の社会的・文化的形態にも大きな影響を及ぼし、その結果、「面子」の心理的原動力が生まれた（翟学偉,2011）。

翟（2011）によれば、中国人の「面子」の心理的原動力には、「祖先崇拜」と「同居共財」という2つの主要な源があるという（翟 2011,p.109）。「祖先崇拜」という心理的原動力について、翟（2011）は次のように指摘している。中国人の観念では、先祖は現世での子孫の振る舞いに関心を持ち、彼らを庇護すると信じられている。また、中国人は死後に先祖に会うと信じており、もし先祖に会いたいと思えば、「先祖に会う面子があるのか」という問題が生じる。そのため、中国人は生きている間に何か悪いことをすれば、死後に先祖に会える面子がなくなるのではないかと、生きている間に心理的なプレッシャーがかかる（翟 2011,p.111）。

また、「同居共財」という心理的原動力について、翟（2011）は次のように論じている。伝統的な「祖先崇拜」の観念の影響で、同じ先祖の姓のもとに血縁関係にある小さな家族がたくさんあり、それが大きな拡大家族を構成している。世代を超えて居住すること、数氏族とともに生活することは一般的に受け入れられている。家族の規模が拡大し続けるにつれて、同じ姓を持つ同居の形態さえ生まれている。家族の財産に関しては、中国人は一般的に外的私有化と内的共有化の原則を適用し、家族内の財産分配は平等分配の原則に従わなければならないことになる（翟 2011,pp.114-118）。ここからわかるのは、伝統的な氏族生活は全体性を重視し、家族は個人よりも重要であり、個人は家族のために自分を妥協することができ、個人の面子は家族の面子を表すということである。

## 2.2 「面子」の儒教的根源

儒教思想は古代から数千年にわたって中国に影響を与え、中国人一人ひとりの心に深く根付いていると

言える。「面子」について考察すると、その儒教的根源が非常に重要だという点を見逃すことはできない。成中英（1986）は、「面子」の儒教的根源について詳述している。成（1986）が指摘している通りで、儒教は個人の修養と社会の調和との関係を強調し、個人の完全は道徳的修養によって達成され、それが社会的・政治的調和につながる（成 1986,p.40）。成（1986）によれば、個人の完全さは単独で達成されるものではなく、五倫（父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、友達の信）<sup>(1)</sup>と呼ばれる社会的関係の中で達成されるという（成 1986,p.40）。この観点から、人々は互いの「面子」を維持し、尊重することによって社会的調和を達成すること、また「面子」がこれらの関係を維持するための重要なツールとなっていると解釈できよう。

また、成（1986）は「面子」を保つための儒教の二本柱は「礼」と「徳」と主張している。成（1986）によれば、「礼」とは社会的行動の規範であり、人々がどのように行動すべきかを規定し、社会の調和を維持するために、社会的相互作用の規範と指針を示すものである。一方、「徳」とは個人の道徳的な資質や行動規範を指し、人々の内面的な価値観や道徳的原則を反映するものである（成 1986,p.41）。これら二つが「面子」を獲得し維持するための基本となっていると言えよう。

さらに、成（1986）によれば、「礼」と「徳」が「面子」を形成するための重要な要素であると述べている（成 1986,p.43）。成の論述では、「礼」を守り、優れた「徳」を持っている人々は、社会的相互作用の中で「面子」を獲得し、維持しやすいとされている（成 1986,pp.41-42）。一方、成（1986）によれば、「面子」は「礼」や「徳」の社会的表現であるとされている（成 1986,p.41）。つまり、人々の「面子」はその人がどの程度「礼」を守り、「徳」を持っているかを反映しているのである。そのため、社会的に「面子」のレベルが高い人々は、「礼」を守り、「徳」があると認識されやすいと言えよう。

## 2.3 近代社会における「面子」の見方

翟学偉（2011）の研究によれば、中国の古典である

『詩経』が作られた時代から、すでに「顔」を特定の心理や行動を識別する手段として用いられていたが、その心理や行動が具体的な問題として認識され、議論されるようになったのは近代になってからであり、これは中国文化と西洋文化の接触が直接的な産物となったという(翟 2011,p.13)。

翟(2011)の説明によれば、特定の文化圏に属する人々の心理的または行動的特徴は、その文化圏の人々自身には明確には認識されないことが多いことがわかる。これらの特徴は、異なる文化背景を持つ人々から観察されることで、より鮮明に認識される可能性が高いと考えられている(翟 2011,p.13)。また、中国人の「面子」の概念も、西洋人が中国の土地を訪れ、中国人の生活と文化に触れるようになる中で、徐々に認識されていったと翟(2011,p.14)は述べている。それによると、中国人の「面子」の概念を理解することは、中国人の心理や行動を理解するための鍵であると言えよう。

アメリカの宣教師である Arthur Smith (2009) は、中国人の「面子」の特徴を最初に指摘した人だと考えられている。Smith は、その著書『中国人の気質』(Chinese Characteristics, 2009)の中で、「中国語では、「面子」という言葉は人間の顔だけを指すのではなく、さまざまな複雑な意味を持つ集合名詞である。この言葉自体が、中国人の多くの重要な特徴を解く鍵になる」と述べている(Smith 2009,p.7)。魯迅(2005)はSmithの著書の影響を受け、『中国人の気質』(2009)におけるSmithの中国人の「面子」に関する記述に言及し、「面子」こそが中国人の重要な国民性の複合的な鍵であると主張している(魯 2005,03 巻,p.344)。

1919年の五四運動により中国では東西文化論争が高潮に達しており、論争の中心は中国人の国民性となり、魯迅をはじめとする多くの作家や学者が国民の劣等性を激しく批判した(翟 2011,p.18)。例えば、魯迅(2005)は『説「面子」』(面子を語る)というエッセイの中で、中国人にとっての「面子」の重要性を強調し、「面子」は「中国精神のプラットフォームであり、それを掴みさえすれば…全身がそれとともに動く」と述べている(魯 2005,06 巻,p.130)。しかし、「面子」の

完全な定義は魯迅にもできなかったと考えられている。「面子」は「顔」に似ているが、ある境界線が存在し、この境界線を下回ると「面子」を失う、すなわち「丟臉」(恥ずかしいこと)となり、この境界線を超えれば「面子」がある、すなわち「顔見せ」になると魯迅は述べている(魯 2005,06 巻,p.130)。また、林語堂(1994)は『中国人』の中で、「面子、運命、恩」を中国を支配する「三つの女神」とし(林 1994,p.199)、その中で「面子」は最も重視される要素であり、中国人は「面子」のために生きていると主張している(林 1994,p.204)。

翟学偉(2013)は、「中国の社会・文化・心理を研究する海外の学者たちは、必ずしも多くの点で一致していないが、面子が中国人の最も重要な心理・行動的側面であるという見解では、かなり一致している」と述べており(翟 2013,p.155)、中国人の「面子」についての西洋の学者たちの見解を数多く引用している(翟 2013,p.154)。例えば、ドイツの社会学者 Max Weber は、『儒教と道教』(1915)の中で、儒教が重視している面子は一般的な信頼の欠如につながり、あらゆる企業活動に影響を及ぼすと論じている。この見解を受けて、アメリカの社会学者 Parsons は『社会的行為の構造』(1961)の中で、儒教は人間の現世行動と良い評判にしか関心がないと主張している。アメリカの社会学者 M. Thelin (1986) は、その研究の中で、中国人の価値観が、家族主義、尊老、人情主義、礼儀正しさ、面子、男性中心という6つの側面からなることを指摘し、その中で「面子」がこれらの概念の中心にあると指摘している。

以上のことから、「面子」は中国の社会と文化を理解する上での鍵概念であると言える。この概念は、中国文化の重要な特性であり、また、中国人の心理や行動を理解する一手段ともなっている。

### 3. 本研究の課題:理論研究の整理を通じて「面子」の概念についての考察

「面子」の歴史的背景を追うことにより、この概念が古代から近代まで中国社会に深く根ざしているこ

と、そして中国人のライフスタイルに重要な影響を与えていることが明らかになる。近代社会においても、「面子」の概念は一部の西洋研究者の関心を引きつけ、この研究が多く中国の学者に、自国の国民性を再評価し、批判する機会を提供している。

しかしながら、「面子」とはいったい何なのか、その構造と機能は何なのか、多くの中国人ですら言いたくても明確に完全に説明できない状況である。従って、上記の先行研究の整理を踏まえ、本稿はこの研究領域の一部の著名な学者の理論を整理することで、「面子」の概念をさまざまな角度から考察することを目指す。また、「面子」は文化的に普遍的な概念であるため、いくつかの研究成果を踏まえながら、日中両国における「面子」の概念の相違点をも検討する。

#### 4. 「面子」の理論研究

19世紀末のSmithの「面子」の記述から、その意味に最初に関心を持ったのは魯迅や林語堂といった作家たちであった。1940年代になって、人類学者の胡先晋が理論的な観点から「臉」と「面」を別々に定義した後、何友輝、金耀基、翟学偉、Goffmanなどの社会科学の研究者たちが、さまざまな学問的観点から「面子」の概念を詳細に検討するようになったが、その中で最も影響力を持ったのが胡先晋(1944)の定義とGoffman(1955)の2つの定義であった。西洋式の「面子」研究はGoffmanの定義を主に採用し、中国式の「面子」研究は胡先晋の定義を主に採用していると言われる(翟 2011, pp.36-37)。本章は主に、胡先晋、Goffman、成中英、何友輝、金耀基、翟学偉の「面子」理論に着目し、「面子」の概念を検討する。

##### 4.1 胡先晋の「面子」理論

中国の「面子」概念を学術的に考察した最初の学者の一人が、1940年代にアメリカに留学した人類学者の胡先晋である。胡は1944年に「中国人の臉面観」(The Chinese concepts of "Face")という論文を発表し、「面子」の理論研究の幕を開いたとされている。

胡先晋(1944, p.1)が指摘しているように、「面子」という概念から、中国人が威信を得るため、そして地位を確保し上昇させるための2つの基準が浮かび上がり、同じ文化構造の中で異なる態度がどのように妥協されるかが明らかにされる(胡 1944, p.1)。胡の研究では、これら2つの基準は「面」と「臉」という二つの単語によって分けられ、どちらも文字通りには人体の「顔」を指す。

胡(1944, p.1)は、「面」と「臉」をそれぞれ明確に定義している。筆者が次のようにまとめる。

##### (1) 面：

- ① 中国社会において重視される**名誉**を示している。
- ② 人生の中での成功や自慢、出世によって得られる**個人の名声**であり、個人の努力や知恵によって築き上げられた**評判**を表している。
- ③ このような評価を得るために、個人は常に自分が置かれている外部環境に依存している。

##### (2) 臉：

- ① 道徳的な評判の高い人、つまりどのような状況においても自分の義務を果たし、どのような場合においても誠実さを示す人に対して、集団が示す**尊敬**である。
- ② 個人の道徳的人格の完全性に対する社会の信頼を反映しているものである。それなくして個人が社会で適切に生活を送ることは不可能である。
- ③ 道徳的基準を守る**社会的拘束力**にとどまらず、**内面化した自己拘束力**でもある。

胡(1944, pp.2-9)はまず「臉」の意味について、中国人が日常的に使う「丟臉」、「給某人丟臉」、「不要臉」、「没有臉」、「臉皮厚或薄」の5つのフレーズを挙げ、具体例を通して「臉」の持つ多様な意味を分析した。筆者が次のように要約する。

##### (1) 丟臉(面目を失う)：

- ① 「丟臉」とは、集団が不道徳で社会的に好ましくない行動に対して非難することを指す。
- ② 道徳的な規範に違反すること、自分の地位にそぐわない行動をすることは、「丟臉」につながる。

③ 「丢臉」は、社会的非難という意味にとどまらず、自分の人格に対する信頼の喪失という意味でも強く感じられる。

④ 中国人の日常生活は、信用の上に成り立っているため、「丢臉」を怖がるのがよく見られている。「丢臉」を怖がることは、道徳的境界線に対する個人の意識を保ち、個人の道徳的価値を維持し、社会的拘束力を示す。

(2) 给某人丢臉 (ある人の面目を潰す) :

① 個人は通常、栄誉と恥辱を分かち合う緊密に統合された集団に属しているため、ある人が面目を失うと、単に自分の面目を失うにとどまらず、他の人にとっても面目を失うことになる。

② 中国の年長者は、若者に向上心やルールを守るよう動機付けるために、「私たちに恥をかかすな」をよく言うという例から、「臉」という概念は中国の若者の心に深く根付いていることがわかる。

③ 「丢臉」の程度は、個人の失敗の程度にとどまらず、個人との関係の親密さによっても異なる。

(3) 不要臉 (恥知らずだ) :

① 「不要臉」とは、社会からどう見られるかを無視し、個人的な利益のために道徳基準に違反することを意味し、極めて厳しい非難である。

② 「不要臉」という表現は、主に「個人的な利益のために他人のうまい汁を吸う」に適用されている。

③ 「不要臉」の人は社会のルールを認めていないため、社会的規制力が効かない。

④ 「不要臉」の人は通常、法律によって罰せられたり、世間から非難されたりすることはないかもしれないが、彼らが不利な状況に陥った時、社会は彼らを道徳的にも物質的にも支援することではなく、彼らが社会的ネットワークに頼ることもできなくなる。

(4) 没有臉 (面目ない) :

① 「没有臉」は、「不要臉」とほぼ同義語である。

② 「没有臉見某人」(ある人に会う面目がない)とは、誰かが個人的な過失によって他人を失望させた時によく使われる言葉である。たとえ誰もその場にいなくても、その人は他人の信頼を裏切ると

いう意識がある。

③ 「没有臉」は社会的規制の完全な内面化を示している。個人は自己の「面子」を守るために、社会的に許容される行動を常にとっている。

(5) 臉皮厚或薄 (厚かましい恥ずかしがり屋) :

① 「臉皮厚」は、「不要臉」と同じ意味であるが、より優しいと思われている。その象徴的な意味は、顔にはまだ皮膚が残っているが、社会的否定で浸透しにくいということである。世間の批判を無視することを意味する。

② 「臉皮薄」は、世論に非常に敏感で、自分の評判を保つためにあらゆる努力をすることを意味する。例えば、友人からのちょっとした批判も受け入れられないほど「臉皮薄」の人もいる。しかし、社会的には「臉皮薄」の人の方が社会規範を守れるので好まれる。

胡によれば、「臉」に関する5つのフレーズが示す通り、「丢臉」は個人に強い羞恥心を与える(胡1944, p.9)。自分の「臉」を軽んじる人は、社会的規制を無視する形になるため、社会からは「臉」の意識を強く持つようにプレッシャーがかけられるということが明らかになる。また「丢臉」を意識することは、個人の品格に対する社会からの信頼が失われ、自身が蔑視され孤立するリスクがあるということでもわかる。

次に胡(1944, pp.9-14)は、「面」の4つの具体的な意味と20の象徴的な意味を分析している。「面」の4つの具体的な意味について、筆者が次のようにまとめる。

- (1) 生理学的意味としての「顔」: 面貌、面目、面如桃花<sup>(2)</sup>、白面書生<sup>(3)</sup>
- (2) 物のおもて: 表面、桌面(机の表面)、地面
- (3) 方向: 東面、西面
- (4) 方面: 正面、対面

「面」の20の象徴的な意味について、筆者が次のようにまとめる。

- (1) 社交意味中的“面”(社交的な意味での「面」): 「八面玲珑」(日本語では「八方美

- 人)のように、どんな状況でもさまざまな人とスムーズに付き合うことを指す。
- (2) 人相互面对の場合(人と人が向かい合う場面):「会面」(日本語では「会う」)、「当面商談」(日本語では「直接話し合う」)などである。
- (3) 体面(世間に対する体裁;美しい):外見、または社会的賞賛と結びついている。
- (4) 面皮薄(恥ずかしがり屋):「臉皮薄」と同じ意味であり、中国の長江流域では「臉皮薄」ではなく「面皮薄」を言うのが一般的である。
- (5) 顾面子(相手の顔を立てる;自分の体面にこだわる):個人が自分の評価を高めるために自分の面子を考慮すると同時に、他人の面子を考慮しなければならないことを指す。
- (6) 面子上不好看(体裁が悪い):社会的非難に直面した時、その人がどのように感じるかを表現しているフレーズである。
- (7) 增加面子(面子を増加する):自分の行動によって社会的評価を得ると、その人の「面子」は増える。
- (8) 争面子(…の名誉のために頑張って承認を得る):二人は肯定的な世論や注目を集めようと、互いに競争する。
- (9) 给面子(顔を立てる):「给面子」とは、Aの行動が他人の前でBの威信を高めることを意味する。ただし、「给面子」は時に、「Aが仕事をできないことは誰もが知っているが、彼はBの知り合いなので、Bは彼に顔を立てた」というような皮肉な意味にもなる。
- (10) 留面子(…の顔の立つようにする):教養のある人は、相手の自尊心を保つために、相手のミスや直接指摘することは避ける。もし黙っていれば、後者は自分のミスが他人に注目されることはなく、名誉が傷つくこともないと感じるだろう。
- (11) 要面子(体面にこだわる):「要面子」の人は、自分が実際よりも良い立場にいる、能力がある、社会的なつながりがある、品格的に優れていると見せようとする。
- (12) 敷衍面子(適当にあしらう):AはBをあまり尊敬していないかもしれないが、Bの好意を得るために、Bが不快な思いをしないようにある程度の敬意を示すが、これは本心からではない。
- (13) 讲究面子(面子を重んじる):「面子を考慮する」と近い意味である。
- (14) 没有面子(面子が立たない;顔がない):「没有面子」とは、ある個人が得た社会的評価が、特定の目標を達成するのに十分でないことを意味する。
- (15) 我们有面子/大家有面子(私たち/皆さんは顔が売れている):「我们」(私たち)には相手も含まれているから、このフレーズの「面子」は信頼できる友人関係を表し、互惠の関係を強調している。
- (16) 和我有面子(…は私とのなじみが深い):AはCに頼みごとをする相手が必要で、BはたまたまCのことをよく知っていて、Bが「A和我有面子」(Aは私とのなじみが深い)と云えば、CはAの頼みを断らないだろうという意味である。
- (17) 看在我的面子上(私に免じて):言い争っている二人を説得する時に使う表現である。
- (18) 借某某人的面子(…の顔を借りる):社会的評価の高い人との関係を利用したい時に使われる表現である。例えば、仕事を探す時、「あの人から紹介された」と云えば、「あの人」のことをよく知らなくても、「あの人」の評判のおかげで仕事を得られる可能性が高くなる。
- (19) 托某某人的面子(人に託する):個人から誰かに何かを依頼する時に使われる表現である。
- (20) 面子事情(面子に関する物事):「面子事情」は、純粋に自分の面子を保つため、あるいは誰かの面子を立てるために行う行為を説明す

るために使われる。感情的に言えば、「面子事情」とは、通常、個人がやりたくないがやらなければならないことである。

胡（1944）によれば、「臉」は個人にとって不可分な存在であり、「臉」の保護や喪失は全体として捉えられているのに対し、「面子」は「臉」と異なり、貸し出す、奪い合う、増やす、適当にあしらうことができる（胡 1944,p.15）。言い換えれば、「面子」は量的な言葉であり、「臉」は質的な言葉だと言えよう。

胡（1944）の考えでは、「面子」よりも「臉」の方が基本的かつ重要である。胡（1944）は、「臉」を品格の基本条件とみなし、「臉」は個人の「面子」の量を決める条件の一つであり、いったん「臉」が失われると「面子」を維持することは困難であると指摘しており（胡 1944,p.15）、たとえ最貧困層が「面子」を持たないとしても、道徳的・物質的支援のために「臉」を保とうとすると指摘している（胡 1944,p.16）。また胡（1944）によれば、どのような社会で育っても誰もが「臉」を持つことができるが、「面子」は、家庭の地位や人間関係、他人に影響を与える能力の大きさによって変化しうるものであり、したがって社会における「臉」の役割は、自分の社会的・経済的安定を確保し、自尊心を維持するための手段となり得るといえることがわかる（胡 1944,pp.15-16）。「面子」を「臉」より優先し、「臉」を無視にして「面子」を追求すれば、胡（1944）が指摘したように、日和見主義者の行動につながる（胡 1944,p.17）。

以上を踏まえると、「臉」は「面子」の基本であり、個人が「面子」を持ち、社会的評価を得るための必要条件であると言えよう。また、個人の「臉」の維持は「面子」を増やすことができるが、「面子」の追求は「臉」の維持に直結しないであろう。図1に示す通りである。

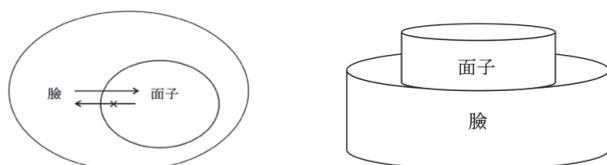


図1 「臉」と「面子」の関係図（筆者作成）

## 4.2 Goffman の「面子」理論

Goffman は 1955 年に、「On Face-Work—An Analysis of Ritual Elements in Social Interaction」（面子行為について—社会的相互作用における儀式的要素の分析）という論文を発表し、Arthur Smith（1894）の中国人の「面子」概念や胡先晋（1944）の「臉面」研究を参考しながら、独自の「面子」理論を提唱した。

Goffman（1955）はまず、「面子」について次のように定義した。

「面子」は、ある特定の接触の際に他人がその人がとった行動をどう見ているかによって、その人が自分自身のために効果的に主張する肯定的な社会的価値として定義されることができる。「面子」は、承認された社会的属性に基づいて自己のイメージを描き出すものであり、他人が共有できるイメージであるかもしれない。例えば、ある人が自分自身のために良いパフォーマンスを発揮することで、その人の職業や宗教にも良いイメージをもたらす場合などである。（Goffman 1955, p.213）

Goffman が提唱した「面子」の定義を見てみると、3つのポイントにまとめることができる。

- ① Goffman のいう「面子」とは、ある特定の社会的相互作用において、ある個人が、他者から想定される行動規範に従って行動することを通じて、獲得した自分自身に対する肯定的な社会的評価である。
- ② この「面子」は、受け入れられている社会的基準に基づいて構築された自己イメージである。
- ③ このイメージは個人的なものだけでなく、集団的なものであることもある。例えば、社会的相互作用の中で良い振る舞いをする人は、自分自身のイメージを高めるだけでなく、自分の職業や宗教、その人に関わる他の集団的なもののイメージを高めることもある。

胡（1944）のいう静的、固定的な「面子」とは異なり、Goffman のいう「面子」は動的である。

Goffman (1955) はさらに「面子」を次のように分析している。

人は、自己の一貫したイメージを効果的に示す行動をとる時、またはそのイメージが他の参加者から伝えられる判断や証拠によって支持され、さらに状況の中で無人の機関から伝えられる証拠によって確認される時、「面子」を持っている、または「面子」を維持していると言われる。そのような時に、人の「面子」は明らかに体内や体上に存在するものではなく、むしろ出会いの流れの中で広がっているものであり、これらのイベントがそれらに表現される評価のために読み取り、解釈されるときだけに現れる。  
(Goffman 1955, pp.213-214)

別の言葉で Goffman の分析を解釈しよう。人は、社会的相互作用の中で示される個人的な行動、態度、発言などが、その人が自己認識している自己イメージと一致しており、矛盾がない時、また、他の参加者の判断や確認、さらには社会のルールや法律など、非人間的な制度の証拠が、この自己イメージを外的に検証してくれる時、「面子」を持っている、あるいは「面子」を維持している、と言われる。この場合、「面子」は自分の身体に固定されたものではなく、相互作用における出来事の流れの中に分散している。これらの出来事を読み解き、そこに含まれる評価を表現することによって、初めて「面子」が可視化されるのである。

ここから、Goffman のいう「面子」とは固定された物質的な属性ではなく、特定の社会的相互作用や人間関係の中で人が構築し、表示し、維持する動的な自己イメージであることがわかる。

Goffman (1955) は、個々の「面子」への関心がどのように現在の行動と社会全体との関連性を左右するかを説明している。

面子への配慮は、人が現在の活動に注意を集中させる一方で、その活動で面子を維持す

るためには、それを越えた社会全体の中での自身の立場を考慮する必要がある。現状で面子を維持できる人とは、後で直面することが難しい特定の行動を過去に控えた人のことを指す。さらに、彼は今面子を失うことを恐れている。その一部は、他人がこれを将来彼の気持ちを考慮する必要がないという合図として取る可能性があるからである。しかし、現状と広範な社会世界との間のこの相互依存には制限がある：彼が再び取引することのない人々との出会いは、彼が将来信用を失う態度を取る自由を与え、または彼らとの未来の取引が恥ずかしいものになるような屈辱を受ける自由を与える。(Goffman 1955, p.214)

すなわち、ある状況において、人が良い面子を保つことができる場合、それは通常、その人が過去に、将来直面することが難しくなるような行動を避けてきたことの表れである。ある人が今、面子を失うことを心配しているのは、そのことが将来、自分の気持ちを無視することになると他人に見られることを恐れているためでもある。将来再び交流する可能性が低い人たちを相手にしている場合、その人は、将来問題を引き起こすかもしれない行動を取ったり、あるいは将来の交流が気まづくなるかもしれない屈辱を我慢したりすることがあるが、それは再び交流する可能性がないことを知っているからである。また、Goffman (1955, p.214) は、社会的相互作用の中で、ある人のイメージがその人の社会的価値の情報と一致しない時、あるいはその人が適切なイメージや行動様式を用意していない時に、‘wrong face’ と ‘out of face’ の二つの状況が起こりうる状況と指摘している。Goffman (1955) によれば、‘wrong face’ (間違った面子) とは、ある人の社会的価値に関する情報が何らかの形で公開されたにもかかわらず、その情報と本人が維持しているイメージとが (努力しても) 一致しないことを指す。その結果、その人のイメージにひびが入り、社会的な場面で気まづく見えることがある。‘out of face’ (面子がな

い)とは、その人が適切なイメージや行動様式を準備することなく社会的相互作用に参加することを意味する。この場合、本人は期待されたイメージや行動様式に沿わないこともあり、社会的な場面で気まずい思いをすることもある (Goffman 1955, p.214)。  
‘wrong face’ と ‘out of face’ の状況になれば、Goffman (1955) が指摘したように、社交行動が乱され、潜在的に評判を落とす可能性があり、その結果、羞恥心や自尊心の低下を感じるだろう。

一方、自分の面子を保っていることに気づいた時、人は通常、自信と安心感を抱いており、他人に堂々と自分を見せるようになると Goffman (1955) は指摘している。

個人がどこまで自分の「顔」を保つべきかについて、Goffman (1955) は次のように述べている。

…彼が一度「面子」を通じて自己イメージを持つと、そのイメージを保つことが求められる。異なる社会では異なる方法で、彼は自尊心を示すことが求められる。彼にとって高すぎるか低すぎる行動を避ける一方で、自己を犠牲にしてでも行わなければならない行動もある…認められた属性とそれらの「面子」への関係は、全ての人を自身の「獄吏」にする。これは基本的な社会的制約であり、各人が自分の「監房」を好むかどうかに関わらずそうである。(Goffman 1955, p.215)

ここから次のように理解できる。人が「面子」を通じて表現されるアイデンティティを選択する時、その人はその「面子」を維持する責任を負う必要があるということである。自分の「面子」を維持しなければならない状況に入った時、自分の行動や態度が自分の「面子」と一致しているかどうかを常に警戒する必要がある。また、誰もが自分の社会的地位や身分を気に入っているかもしれないが、自分の「面子」を保つために常に自分の行動を意識しなければならないので、それは誰にとっても監房のようなものであり、基本的な社会的拘束である。

次に Goffman (1955) は、面子の ‘the rule of self-respect’ (自尊規則) と ‘the rule of considerateness’ (思いやり規則) の二つの規則を主張している。Goffman によれば、「自尊規則」とは、主に他人の前での自己イメージに反映されるものであり、自分の「面子」を保つだけでなく、自分のイメージを損なうようなことを避けることでもあること、また、他人が辱められているのを冷淡に見たり、自分が辱められているのを無視したりできる人は、一般に「薄情」あるいは「恥知らず」とみなされることである。「思いやり規則」とは、人間関係においては、誰もが他人への敬意と配慮を保つべきであり、他人の顔を立てることであること、また、誰もが相手の感情を傷つけないように心がけるだけでなく、相手のイメージも維持しようとすることである (Goffman 1955, p.215)。

この二つの規則に関しては、Goffman が提唱したもう一つの解釈アプローチの観点からも理解することができる。Goffman (1955) の解釈によれば、社会的相互作用において、人は自分の「面子」を守ること (防衛志向と呼ばれる) と他人の「面子」を守ること (保護志向と呼ばれる) の両方を考える必要があり、人は一般的に両方の志向性を同時に持っている (Goffman 1955, p.217)。また、Goffman (1955, p.217) が指摘したように、他人の「面子」を守ろうとする時、個人は自分の「面子」を失わないような戦略を選択する必要がある。同様に、個人が自分の「面子」を守ろうとする時、自分の行動が他人の「面子」を失うことにつながるかもしれないという事実を考慮しなければならない。

以上のことから、人は自分の「面子」を維持するためにさまざまな手段に出るが、その際、自分の「面子」を脅かすような出来事に遭遇することもあるということがわかる。これに対して Goffman (1955) は、‘face-work’ (面子を保つための努力; 面子のための作業) という概念を提唱した。これは、人々が自分の行動を「面子」に適合させるためにとるさまざまな行動を指す。Goffman (1955) の説明によれば、‘face-work’を以下の4つの特徴にまとめることができる。

① ‘face-work’は主に、人々の社会的イメージを脅か

すような象徴性の高い出来事など、「面子」を脅かす可能性のある出来事に対応するために用いられる。

- ② 「平静を保つ」ことは、‘face-work’の重要な一形態である。平静を保つことで、人は自分の恥ずかしいという感情をコントロールすることができ、その結果、自分の恥ずかしさで他人を困らせることを避けることができるからである。
- ③ 人々が「面子」を保護するという行動の結果を十分に認識しているかどうかにかかわらず、こうした行動は常に習慣化され、規範となる。
- ④ 社会や文化が異なれば、「面子」を保護する方法はそれぞれ異なるかもしれないが、これらの方法は要するに、社会的相互作用における個人の社会的イメージや地位を維持または回復するために考案されたものである。

Goffman (1955) は‘face-work’の基本的なタイプについても詳しく述べているが、ここでは簡単に要約する。

- ① 回避：これは最も基本的な「面子保護」行動である。人は「面子」を脅かす出来事を無視するか、「面子」への脅威を和らげる合理的な説明を探すかを選ぶ。もしその出来事に責任がないのであれば、その無視は忍耐（脅威に対して反撃の衝動を抑え、感情的な反応を抑制する）によって支えられる必要がある。もしその人が脅威行為の加害者であれば、その無視はそれに対処する方法（謝罪や説明）を模索することによって支えられる必要があるが、これはその人を他者の協力的な忍耐（相手が自分の謝罪や説明を受け入れ、間違いを直す機会を与えてくれるかどうか）に依存させることになる。
- ② 是正プロセス：「面子」を脅かすような出来事が起こり、無視することが困難な場合、人々は修正プロセスを開始するようになる。是正プロセスには、挑戦（失礼な言動をする行為を指摘する）、提供（失礼な言動をする人に間違いを直す機会を与える）、受容（違反者が是正を受け入れる）、感謝（許した人が許してくれた人に感謝する）の4段階が含まれる。

- ③ 賠償と自罰：失礼な言動をする人が他人の「面子」を脅かした場合は賠償を与えることができる。また、失礼な言動をする人が自分の「面子」を脅かした場合は自罰（自分の過ちを公に認めたり、積極的に責任を取ったりすること）を行うことができる。
- ④ 是正の拒否：場合によっては、失礼な言動をする人が警告を受け入れず、それを是正する代わりに攻撃的な行動を続けることがある。この場合、挑戦者（脅かされる人）はこの反抗的な行動（報復すること、相互作用から撤退すること）に対抗するための手段を講じる必要がある。
- ⑤ 感情の表現：人は自分や他人の顔が傷つけられることに苦痛を感じたり、自分の顔が脅かされることに怒りを感じたりするように、‘face-work’の過程では、感情の表現も重要な役割を果たしている。

以上から見ると、Goffman の「面子」理論は、すべての人間に共通する行動パターンを反映している。つまり、「面子」や、面子を保つための努力に関する‘face-work’は、どの国に住んでいようと、人々が社会的相互作用の中で遭遇する避けられない問題なのである。

### 4.3 成中英の「面子」理論

理論的な分析を進める前に、成中英（1986, pp.34-35）はまず価値としての「臉面」（顔）の重要性を説明している。次の3点にまとめる。

- ① 顔は個人の社会的存在を示す重要なものであり、日常生活を有意義なものにする最も重要な官能である。
- ② 顔は個人を識別する唯一の手がかりであり、個人のアイデンティティの基礎となるものであるから、個人のアイデンティティとその人の独自性を示すものである。
- ③ 顔は、個人の身体的特徴と精神生活を動的な全体へと統合しており、この動的な全体とは、精神と身体が顔の中でうまく統合されていることを意味し、人は顔とその表情を注意深く観察することで、精神生活の状態とその変化を観察することができる。

成 (1986) は胡 (1944) の「臉面」二分法に基づいており、それによって「面子」を「臉」と「面」から論じている。

(1) 「面」:

成 (1986, pp36-37) は、社会における「面子」という概念の主観的な次元と客観的な次元について論じている。表 1 にまとめる。

表 3 「面子」の二つの次元

「面子」の次元	定義	特徴
主観的な次元	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「面子」は社会関係や社会全体における個人の自尊価値や自分自身の重要性を表す。</li> <li>● 人々は、自尊心を得るため、社会の他のメンバーから尊敬されるため、あるいは社会の一員になるために、「面子」を頼りにしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自分の社会的尊重や社会的地位（影響力や権威）に対する個人の推定である。</li> <li>● 必ずしも客観的な次元での「面子」とイコールではない。主観的に「面子を失った」と感じていても、客観的に「それほど面子を失っていない」となる</li> </ul>
客観的な次元	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「面子」は、同じ社会やコミュニティの他のメンバーから認められる個人の社会的地位を指す。</li> <li>● 特別な場合に特別な人から認められる社会的地位や価値として表現されることが多い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 他者から承認される自分の実際の社会的地位（影響力や権威）のことである。</li> <li>● 客観的な「面子」での社会的承認は、少なくとも 2 人あるいは 2 人以上の関係が必要である。</li> </ul>

出典：成中英,1986,「臉面觀念及其儒学根源」,『中国

社会心理学レビューVol.2』,2006,翟学偉(特約編集者),社会科学文献出版社,pp.36-37より筆者作成。

成 (1986, pp.37-38) はまた、「面子」に関する 4 つの特徴を分析している (1986, pp.37-38)。筆者が次のように要約する。

- ① 「面子」の測定可能性: 「面子」の価値は、「大きな面子」「小さな面子」のように、大きいか小さいかで測ることができ、これは影響力、社会的名誉、尊敬といった要素に関係する。
- ② 「面子」と職位の相関性:
  - 「面子」は個人の正式な職位に関係しており、職位が高いほど「面子」は大きくなり、影響力や権威も増える。
  - 「面子を失う」というのは、単に自分の職位が他人から尊重されなくなることであり、職位がもたらす影響力や権威がなくなるということではない。
- ③ 「面子」の内的性質:
  - 「面子」の存在は、明示的に表現される必要はなく、通常、要求や希望、提案の中に暗黙的に含まれているが、「私に免じて」のように明示的に表現されることがある。
  - 「面子」は、人間関係や個人利益に関わる行為であるため、社会的関係を維持、強化、低減するために重要な役割を果たす。
- ④ 「面子」に対する主観的な見方:
  - 「面子」は、獲得する、喪失する、維持する、与えることが可能である。
  - 名誉や承認といったプラスの価値もあれば、恨み、恥、憎しみといったマイナスの感情をもたらすこともある。

(2) 「臉」:

成 (1986, pp38-39) は「臉」についても論じている。成によれば、「臉」の定義は個人が持つ基本的な尊厳や、他者から尊重されるべき品性である(成 1986,p.38)。また、成の分析によって、筆者が「臉」の価値を次のようにまとめる。

- ① 「臉」 > 「面子」:

- たとえ「面子」を持つことを期待していなくても、誰もが自分の「臉」を守りたい。
- 「臉」を失うことは、他人の前で尊厳を失うことであり、深刻な恥とみなされる。これに対して、「面子」を失うことは、単に名誉や尊敬を失うことを意味し、必ずしも個人的な恥を伴うとは限らない。
- 「丟臉」は自分の過ちを責めることを表し、「丟面子」は、責任を他人に押し付けることができることを表す。

② 「臉」は社会規範と関係する：

- 「臉」は社会的相互作用のためのマスクであり、社会規範に従うことによって維持され、守られる必要がある。人は、自分の行動、または親戚の行動が自分の羞恥心を引き起こす時、「丟臉」を感じるようになる。
- 人が「丟臉」する時、モラルが低いとみなされる。
- 人が「撕破臉」(仲たがいで公然と言い争う)する時、その人はもはや社会規範を守らず、単に自己利益に従ってのみ行動するようになる。

成(1986)は最後に「臉」と「面子」の関係をまとめている。成によれば、「臉」と「面子」は、社会における個人の尊厳、社会的承認の2つの極限を表しており、「面子」は個人の尊厳、社会的承認の上限であり、「臉」はその下限である(成 1986,p.39)。

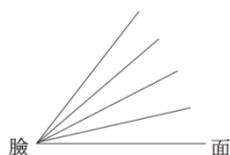


図2 「臉面」の関係図

出典：成中英,1986,「臉面觀念及其儒学根源」,『中国社会心理学レビューVol.2』,2006,翟学偉(特約編集者),社会科学文献出版社,p.39より引用。

つまり、「臉」は基礎であり、「面子」はその基礎の上に成り立つ社会的承認の度合いである。上の図2に

示すようである。

成(1986)と胡(1944)の見解には共通点がある。両者とも「臉」が「面子」の基礎だと考えている。もし「臉」がなければ、その人は「面子」を持つ合理性を失うし、たとえ「面子」があっても、それは社会から認められない否定的な「面子」である。しかも、両者とも「臉」はすべての人が持っているものであり、「面子」がなくても「臉」を持つことはできると考えている。

4.4 何友暉の「面子」理論

何友暉(1974)は、胡(1944)の「臉面」論を基礎にしたのではなく、別の視点から「面子」を論じており、独自の研究を発表している。何(1974)は「面子」を、個人がその社会的地位や貢献によって他者から得る尊敬や敬意と定義している。Goffman(1955)と似たように、何(1974)は「面子」の普遍性についても分析しており、「面子」が中国特有の社会現象ではなく、すべての人間社会における普遍的な現象であることを強調し、現代の西洋社会では個人主義が強調されているが、「面子」の概念が消えたわけではないと指摘している。

何(1974, pp.20-24)は「面子の質的・量的側面」「面子の喪失と獲得」「面子の交互性と社会的コントロール」の観点から面子を分析している。何の分析を通して筆者が以下のようにまとめる。

① 面子の質的・量的側面：

- 量的側面：「面子」の大きさや量は、個人の社会的地位によって左右されることが多い一方、常にその人が所属する集団によって変化してくる。
- 質的側面：「面子」の基礎は地位である。

「面子」は、個人的な資質など生得のものに依存することもあれば、努力によって獲得した富や社会関係、権威などの非個人的な要素に依存することもある。

② 面子の喪失と獲得：

- 「面子」の喪失と獲得は、社会的相互作用における個人の地位とイメージの変化を伴

うものであり、それらは単に対立するものではなく、個人に期待される行動のレベルと密接に関係している。

- 「面子」の獲得は、通常、社会的に承認される模範的な行動をしたり、個人の能力を示したり、昇進を通じて地位を高めたりすることである。しかし、「面子」の獲得を単に「面子」を増やすことと同一視することはできない。「面子」の獲得は、個人に対する期待を上回ることよりも、むしろその期待を満たすことだからである。
- 「面子」の喪失は、個人に対する基本的な期待に応えられないことと関連している。これには、最低限の許容レベルを下回る行動や、個人の社会的地位に関連する基本的要求を満たさないことが含まれる。「面子」の喪失は連続的なプロセスではなく、全か無かのものでもない。「面子」の喪失は一時的で可逆的な場合もあれば、永続的で不可逆的な場合もある

③ 面子の交互性と社会的コントロール：

- 面子の交互性：社会的相互作用において、人の「面子」はその人自身の行動だけでなく、他者の期待や行動にも関係している。例えば、自分の友人や家族、部下に対して他人が無礼な振る舞いをしたために、その人は「面子」を失ったと感じるかもしれない。
- 面子の社会的コントロール：「面子」は社会的コントロールの道具としても使える。「面子」を持つ人は他者に対して大きな影響力を行使することができ、支配力を行使することさえできる。このコントロールは権威のそれとは異なり、他者に対する期待に基づいている。同時に、自分の「面子」を保つ人は、他者の「面子」を大切にし、その見返りとして適切な敬意を示す必要がある。このような「面子」重視の行動様式によって、社会的ネットワークのメンバーは

相互に拘束力を発揮することができる。

何（1974）と成（1986）はともに「面子」の量的特性を指摘していることがわかる。また、何

（1974）と Goffman（1955）に共通するのは、社会的相互作用において、自分の「面子」を保つだけでなく、他者の「面子」を尊重する必要性を強調していることである。

また何（1974, pp.24-29）は、「面子は〇〇ではない」という観点からも、「面子」の特徴を分析している。何の分析を通して筆者が以下のようにまとめる。

- ① 面子は行動の基準ではない：「面子」は、個人がどのように行動すべきかを直接的に設定したり決定したりするものではない。むしろ「面子」とは、特定の文化の価値観に基づいた、人々の行動に対する評価のことである。「面子」を判断する基準は、文化によって、また同じ文化であっても時代によって異なることがある。このような変化は、社会的変遷を反映し、社会的変遷の原因になる。
- ② 面子は人格の変量ではない：「面子」は個人の固有の特徴ではなく、個人の私的な自己評価プロセスによって決まるものでもない。むしろ、社会的相互作用のプロセスで形成され、他者からの評価に依存するものである。
- ③ 面子は地位、尊厳、名誉ではない：
  - 「地位」は社会システムにおける個人の位置であり、個人の「面子」の大きさを決定する主な要因であるが、「面子」は「地位」に直接依存するのではなく、「地位」を占めている人に依存するものである。
  - 「尊厳」が個人の内的な資質を重視し、個人が努力して獲得するものに対し、「面子」は「尊厳」の前提条件であり、その意味で「尊厳」よりも基礎的なものであり、「名誉」や「尊厳」よりも広い概念である。
- ④ 面子は声望ではない：面子と声望は関連があっても、多くの点で異なる。
  - 「声望」とは、主に個人の能力、貢献、資質

などの要素に基づく評価であり、集団が個人に対して抱く尊敬や信頼の度合いを示す尺度である。「声望」は、才能、専門性、信頼性、完璧な個性など、認められたパフォーマンスを通じて得ることができる。「面子」の概念は「声望」より広く、個人的な要素と非個人的な要素(社会的地位や家庭の背景など)の両方を含んでいる。

- ある人が「面子」を持っていても「声望」を持っていないこともあるし、その逆もまた然りである。誰もが「面子」を持つ必要があり、それは自然な権利である。「声望」がなくても生きていくことはできるが、「面子」がないと生活は困難になる。
- 「声望」が得られれば、「面子」も得られる。「面子」を得た時に、「声望」を必ずしも得られるわけではない。「声望」を失うと、対応する「面子」が減る。「面子」を失うと、「声望」も失う。

何(1974)が分析した「面子」は、生まれつきのものでなく、自己だけに依存するものでもなく、他者の評価に依存していることがわかる。また、何(1974)は胡(1944)の「臉面」論を受け継いでいるわけではないが、彼が分析する「面子」と「声望」の関係は、この「声望」が胡の分析する「臉」とある程度似ていること、すなわち、「声望」も「臉」も個人の内的資質の反映であることを示しているが、胡の分析する「臉」の喪失は何の分析する「声望」の喪失よりも強いという違いがある。

#### 4.5 金耀基の「面子」理論

金耀基(1988)は胡(1944)の「臉面」論に基づいて独自の「面子」理論を展開している。金(1988)によれば、「臉」は自分が行動規範を守っているかどうかに対する自己判断であり、「面子」は社会が人の身分、政治権力、学術修養などの目で見える成就に与える承認である(金 1988,p.51)。

また、金(1988)は胡(1944)の「臉面」論を基礎として、「面子」を「社会的面子」と「道徳的

面子」に分けている。以下の表2にまとめる。

表4 「社会的面子」と「道徳的面子」

	定義	特徴
社会的面子	社会から個人に与えられる承認である。社会的相互作用の他律性を反映している。	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 個人の行動が与えられた社会的面子が十分に値すると証明しない限り、社会はそれを取り返すことができる。</li> <li>● 面子は量的な性質がある。社会的面子の大きさは、個人の地位や社会的資源(富、権力、人脈など)の量によって決まる。</li> <li>● 社会的面子には、「面子工夫」、つまり人間関係において人々が面子を維持・保護するために身につける社会的テクニックが含まれる。「面子工夫」は、自分の面子だけでなく、相互作用における他者の面子にも関係する。</li> </ul>
道徳的面子	一種の道徳的な品性であり、道徳的な評判のある人に対する集団の尊敬である。社会的相互作用の自律性を反映している。	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 道徳的面子は、社会の誰もが持つことができ、普遍性を反映している。</li> <li>● 道徳的面子は、大きさといった量的な性質はなく、増減の尺度もほとんどない。固定されたものであり、あればある、なければないのである。</li> <li>● 道徳的面子は、必ずしも他人の判断に頼る必要はない。道徳的面子の要求を満たすかどうかは自己判断に頼る。</li> </ul>

出典：金耀基,1988,「‘面’‘耻’与中国人行為之分析」,『中国社会心理学レビューVol.2』,2006,翟学偉(特約編集者),社会科学文献出版社,pp.52-60より筆者作

成。

金 (1988) が分析した「社会的面子」と「道徳的  
面子」から、彼の理論と他の学者の理論との間に多  
くの類似点を見出すことができる。第一に、金  
(1988) の「社会的面子」は胡 (1944) の「面」に  
対応し、「道徳的面子」は胡 (1944) の「臉」に対応  
する。第二に、金 (1988) は、何 (1974) や成  
(1986) の分析と同様に、「社会的面子」は量的な性  
質があると主張している。さらに、金 (1988) は  
「面子工夫」について言及しているが、これは  
Goffman (1955) の‘face-work’と非常に似ており、両  
者とも社会的相互作用の中で、人々が自分の「面  
子」を守るために様々なストラテジーを用い、他者  
の「面子」を保とうとする必要性を強調している。

#### 4.6 翟学偉の「面子」理論

翟学偉 (1995) は、胡 (1944) の「臉面」論に基  
づいて「臉面」の意味分析を行い、「臉」と「面子」  
の関係を論じている。

翟 (1995, pp.219-220) は、なぜ「臉」と「面子」  
をそれぞれ定義するべきかについて説明している。  
翟 (1995) の分析を通して以下の3点にまとめる。

- ① 「臉」は個人の行動に関係し、個人自身のイメ  
ージや行動に焦点を当てる。「面子」は社会的相  
互作用に関係し、相互作用する二人が置かれて  
いる関係的状况を重視する。
- ② 中国語では、「臉」は人の体の一部だけを意味す  
るが、「面」は人の体の一部だけでなく、人間関  
係を意味し、「対面」、「面談」のようである。
- ③ 「臉」は社会的行動を表し、「面子」は社会的相  
互作用を表す。社会的行動があつてこそ社会的  
相互作用があり、社会的相互作用には社会的行  
動が含まれている。

「臉」と「面」の定義について、翟 (1995) によ  
れば、「臉」は社会的に承認されるイメージに合致す  
るために、個人が印象管理を通じて表す心理・行動  
である。それに対して「面子」は、個人が他者評価  
と自己期待が一致するかどうかを判断する心理的プ  
ロセス及びその結果である (翟 1995, p.220)。この定

義に対して、翟 (1995) は5つのポイントをまとめ  
ている。

この2つの定義の重要なポイントは、①  
「臉」とは個人のイメージや行動様式であ  
る。②このイメージは個人が属する社会的集  
団に基づいている。つまり、「臉」の獲得と喪  
失はその社会的集団が決定する。③「臉」に  
対する評価が現れると、「面子」が現れる。④  
その評価が肯定的なら「面子がある」とな  
り、否定的なら「面子がない」となる。ま  
た、「面子を与える」は、個人のイメージに関  
わらず肯定的な評価を与えることを指し、「面  
子を与えない」は、個人のイメージに関わら  
ず否定的な評価を与えることを指す。⑤個人  
が「面子」を持つか否かに関わらず、その程  
度には差がある。例えば、「面子が大いにあ  
る」、「少しだけ面子がある」、「あまり面子が  
ない」、「全く面子がない」などといった感じ  
で、他者の心の中での地位が決まる。(翟  
1995, p.220)

「臉」と「面子」の定義に関する翟 (1995) の分  
析から、翟が「臉」の重要性を強調しており、「臉」  
が「面子」の必要条件であること、つまり「臉」が  
あるためには「面子」があり、「面子」があるかない  
かは「臉」の性質によって決まるという点がわか  
る。これは胡 (1944) が「臉」の基本的役割を強調  
したのと似ている。

また翟 (1995, pp.220) が指摘したように、「臉」と  
「面子」の資源にも違いがある。翟 (1995) によれ  
ば、個人の印象管理の資源としての「臉」には、気  
質、性格、能力、知識、道徳、マナー、容貌、身な  
り、話し方などがあり、社会的関係から生まれる心  
理的地位の資源としての「面子」には、家柄、身  
分、地位、名声、権力、金銭、社会的ネットワーク  
などがあるということが明らかになった (翟  
1995, p.220)。

さらに翟 (1995, p.221) は、理性よりも感受性 (人

情)を重視する中国社会の傾向、中国人の人間関係のパターンに採用されている特殊主義、中国人が儀式や交流に形式を好むなどの文化的要因によって、「**臉**」と「**面子**」の間には、統一された連続体から2次元へ分けられるようになることを指摘している。翟が述べたように、

その影響は、中国人が自己イメージを通じて他人の心理的地位を獲得しようとする傾向がなくなり、その結果、中国人は「**面子**」に重きを置くようになり、さらには「**臉**」と「**面子**」の間に分裂を引き起こしていることに現れている。これは、中国人が自己の人格や品性の発揮に焦点を当てるのではなく、他人を重視するか表面的な応酬に焦点を当てるようになったことを意味する。つまり、彼らはどこでも人情や面子を考慮している。(翟1995, pp.223-224)

そのため、翟(1995, pp.223-224)が指摘したように、自己のイメージ(臉)を構築することから心理的地位(面子)を得る必要はなく、逆に、心理的地位(面子)を得るためには、必ずしも自己のイメージ(臉)の構築に頼る必要はない。これが、翟のいう「**臉**」と「**面子**」の同質性から異質性に向かう」である。そこで、翟は「**臉面**の四分図モデル」を提示している。図3が示したようである。

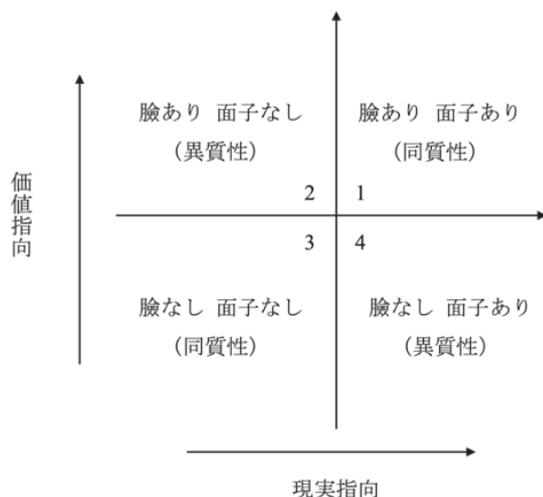


図3 臉面の四分図モデル

出典：翟学偉,1995,「中国人臉面觀的同質性和異質性」,『中国社会心理学レビューVol.2』,2006,翟学偉(特約編集者),社会科学文献出版社,p.225より引用(筆者訳)。

この4つの象限は、実際には中国社会における4つのタイプの人を表している。以下は翟(1995)の分析を通して筆者がまとめたものである。

- ① タイプ1：臉あり、面子あり。これは儒教が求める人の理想像である。彼らは道德規範を守り、自分自身のイメージを作り上げ、他人から高い心理的地位を得ることができる。しかし、タイプ1は理想にすぎないので、そのような人はほとんどいない。
- ② タイプ2：臉あり、面子なし。タイプ2の人は儒教が求める人の理想像(タイプ1の人)を目指しながらも現実に生きていることで、人に重ねられなく、原則に従う一方、面子が得られない「真真正直」の人である。社会では「人との付き合い方を知らない」、「まともすぎる」、「世渡りが下手だ」などと批判されることが多い。
- ③ タイプ3：臉なし、面子なし。タイプ3の人は「**臉面**」の資源がないため社会の底辺にいるが、「**臉面**」への欲望も強い。しかも、タイプ3の人は「**臉**」にも「**面子**」にも縛られず、それゆえ気ままであり、「**面子**」の成功を達成するために逸脱行為を選択する可能性が高い。
- ④ タイプ4：臉なし、面子あり。タイプ4の人は道德や社会規範を守らず、人当たりが良く、情勢をうかがって態度を決める、媚びへつらうのが得意なことである。しかし、彼らは常に社会から優遇されている。

翟の研究の独創性は、中国社会の特徴が「**臉面**」に与える影響を鋭く認識した上で、「**臉**」と「**面**」が統一から分離に向かうと判断し、「**臉**」と「**面**」が分離する4つのタイプに従って、4つのタイプに代表される人の特徴を分析している点にある。

#### 4.7 まとめ

上記の学者の理論によれば、彼らは皆、「面子」を自ら定義しているが、文化的背景、学問的方向性、研究上の関心の違いに影響され、「面子」に対する理解には明らかな違いがあり、心理学か社会学に偏っており、それぞれ「面子」を定義づけるキーワードや研究の独創性にも一定の違いがあることがわかる。表3でまとめたようである。

この表から、「面子」の定義の仕方には違いがあるものの、「自己」と「他者（社会）」の二つの要素は、異なる学者の「面子」の定義に共通するものであることがわかる。さらに分析すると、「自己」については、自分の内面、つまり自分のイメージ、自分の品性などと解釈できるだろう。「他者（社会）」については、他者や社会からの承認、評価などと解釈できるだろう。つまり、内在的な価値と外在的な承

認が「面子」の基本となっていると言えよう。

#### 5. 「面子」の概念の日中比較

「面子」は、文化的に普遍的なものであり、中国以外に多くの国に存在している。中国社会と同様、日本社会も面子を重視している。中西雅之（2005）が述べたように、

... 神を持たない日本人の行動を規制しているものは何か。それは「世間の目」であり、みっともない行為をして世間から冷たい目で見られることが、とても恥ずかしいということになる。「面子」と「世間体」を失って「恥」をかくことが、日本人にとっては何より怖いことなのである。（中西雅之 2005, p.36）

表5 「面子」を定義づけるキーワードと「面子」研究の独創性

学者	「面子」を定義づけるキーワード	「面子」研究の独創性
胡先晋	名誉、名声、評判、尊敬、拘束力	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 初めて「臉」と「面」から「面子」を分析したことである。</li> <li>● 「臉」と「面」をそれぞれ意味分析したことである。</li> </ul>
Goffman	社会的相互作用、行動規範、社会的評価、自己イメージ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「面子」を動的なものとして捉えることである。</li> <li>● 「face-work」の概念を提唱し、人々が社会的相互作用の中でどのように「面子」を維持しているかを探求していることである。</li> </ul>
成中英	主観的、客観的、自尊、社会的地位、社会的承認	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 価値としての「臉面」（顔）の重要性を説明していることである。</li> <li>● 主観的と客観的な二つの次元から「面子」を検討していることである。</li> <li>● 「臉面」関係図を提示し、「臉」と「面」の関係を分析していることである。</li> </ul>
何友暉	社会的地位、尊敬	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「面子」の性質を社会的相互作用の観点から分析していることである。</li> <li>● 「面子とは〇〇ではない」というオリジナルの視点から「面子」と他の概念の関係を明らかになったことである。</li> </ul>
金耀基	品性、尊敬、社会的承認、社会的、道徳的	「面子」を「社会的面子」と「道徳的面子」に分類して分析していることである。
翟学偉	社会的承認、イメージ、印象管理、評価、心理的地位	<ul style="list-style-type: none"> <li>● なぜ「臉」と「面子」をそれぞれ定義すべきかを明らかに説明していることである。</li> <li>● 「臉面」の四分図モデルを提示し、「臉」と「面」が統一から分離に向かうと判断し、異なる性格タイプを分析していることである。</li> </ul>

出典：上記の各学者の「面子」研究より筆者作成

日本人は他人からどう思われるかをとても気にしていることがここでわかる。これは中国人とよく似ていると言えるだろう。また、中国と日本では「面子」という概念に一定の違いがあるため、この問題について研究している学者もいる。本章では、彼らの調査研究を整理し、日中両国の「面子」の概念を比較分析する。

まずは林萍萍 (2017) の研究を見てみよう。林 (2017) は、日本人の大学生 61 人と中国人の大学生 65 人を対象に、面子に関する 11 要素である「名声」、「名誉」、「学識」、「経済能力」、「地位」、「社会的評価」、「権力」、「人脈」、「才能」、「外見」、「道徳」を設定し、面子との関係を「非常に関係がある」から「まったく関係がない」の 5 段階で評価してもらい、「面子」の概念について調査した。図 4 が示したようである。

林の調査結果や考察からわかるのは、日本人が持つ「面子」の概念は名誉、社会的評価、地位、名声、権力、学識とより深い関連性を持つ一方、中国人が持つ「面子」の概念は人脈、才能、道徳とより深い関連性を持つことである。林 (2017, p.212) が指摘したように、日本人の「面子」と深い関連性を持つこれらの要素は、「評判」に關与しており、すな

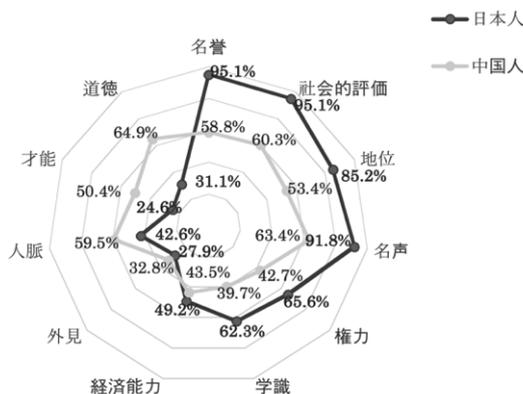


図 4 11 要素と面子との関係についての日中比較 (%)

出典：林萍萍, 2017, 「面子の概念についての日中比較—日中大学生の調査をもとに—」, 『次世代人文社会研究』第 13 号, p.211 より引用。

わち他者から与えられるものであるのに対して、中国人の「面子」と深い関連性を持つこれらの要素は、個人の所有物であり、他者の評価にあまり依存していないものである。この点から林は、日本人の「面子」の概念は中国人の「面子」の概念と比べて、他者を意識する集団主義的な側面をより強く持つ一方、中国人の「面子」の概念は日本人の「面子」の概念と比べて、自己を意識する個人主義的な側面をより強く表れているということを考察している。

次に Zan Helin (2019) の調査を見てみよう。Zan (2019) は、中国語と日本語の母語話者、それぞれ 13 人と 10 人を対象に、「面子」の語義に関する日中の共通点と相違点を明らかにするためのアンケート調査を行った。Zan は、「面子」に関連する 8 つの項目 (道徳、人情、名声/名誉、学識、経済、社会地位と評価、才能、外見) を設定し、それぞれの要素が関与する場面を集団的または個人的な状況に分け、さらにそれらの場面を「面子」に対するプラスの影響とマイナスの影響に分けた。また、Zan は調査対象者に、各場面において自分の気持ちに最も近い表現を選択してもらい、選択可能な表現には、「面子がある」、「面子を失う」などの「面子」を含むものだけでなく、「顔を立てる」、「世間体が悪い」など、面子に関連するが異なる表現も含まれていた。

表 4 「面子」を使う割合

項目と評価 (+/-)	日本語		中国語	
	集団	個人	集団	個人
①道徳	-	40.0	30.0	69.2
②人情	+		0	69.2
③名声/名誉	+	30.0	30.0	76.9
	-	40.0	70.0	46.1
④学識	+	30.0	10.0	84.6
	-	30.0	60.0	30.8
⑤経済	+	0	30.0	38.5
	-	60.0	50.0	23.1
⑥社会地位と評価	+	0	30.0	53.8
	-	30.0	20.0	23.1
⑦才能	+	10.0	30.0	69.2
⑧外見	+		20.0	69.2
	-		50.0	30.8

出典：Zan Helin, 2019, 「日中の「面子」という語義の

異同に関する調査」,『日本語教育方法研究会誌』,25巻,2号,p.63より引用。

Zanの調査結果から、日本語の場合、③名声/名譽(-)、④学識(-)、⑤経済(-)、⑧外見(-)で「面子」を使う割合がより高いことがわかる。また、中国語の場合は普遍的に多く使われていることがわかる。

Zanの考察を見ると、語義の範囲は日本語の「面子」よりも中国語の「面子」の方が広いこと、また、日本語の「面子」は集団的な場面でよく使われているが、個人的な場面では、他の表現が用いられるということが明らかになった。さらにZanの考察では、「面子」に関する場面において、日本語では「面子」以外の表現も頻繁に使われていることが明らかになった。

上記の二人の調査から見ると、日本と中国の「面子」の概念はそれぞれの置いた重点があり、日本人の「面子」は集団主義的側面を持つ一方、中国人の「面子」は個人主義的側面を持つ。また、「面子」の語義の範囲は中国語が日本語より広く、日本語では「面子」以外の表現がより頻繁に用いられるということがわかる。

## 6. おわりに

本稿は文化的特性である「面子」を取り上げ、各学者の理論研究を通して「面子」の構造を探求し、また既存の研究成果を用いて日中両国の「面子」の概念を比較分析した。まず、中国の伝統的な農耕社会の形態と儒教思想が、「面子」という概念に大きな影響を与えていることが確認された。2000年近く続いた封建社会において、「面子」は中国社会と中華文化に深く根ざし、何世代にもわたって中国人の価値観に影響を与えてきたのである。近代に入り、封建王朝の崩壊と共に、多くの外国人が中国社会を観察・研究するようになり、多くの中国人の作家と学者が自国の国民性について批判的に考えるようになった。これが近代中国社会における「面子」への批判的思考を生むきっかけとなっ

た。

1940年代から始まり、胡先晋をはじめとする多くの学者は「面子」について理論的な考察を行い、豊かな研究成果をもたらした。胡先晋(1944)は「臉面」論を提唱した後、Goffman(1955)、金耀基(1988)、成中英(1986)、翟学偉(1995)といった学者たちは、胡の「臉面」論を参考し、自身の研究を展開してきた。これらの学者たちの研究方向や成果はそれぞれ異なるものの、「面子」には個人的な側面と社会的な側面、すなわち「内在的な価値」と「外在的な承認」という共通点を持っている。

さらに、既存の研究成果を通じて、日中の「面子」の概念の相違点を整理したところ、中国語の「面子」の意味範囲は日本語の「面子」よりも広く、両国の「面子」の概念に対する重点も異なっていることが明らかになった。

本稿で取り上げた理論研究は一部の学者に限られている。他の中国の学者や西洋の学者による理論研究や、「面子」行為についての実証研究など、まだ検討すべき課題は多くある。また、本稿では日中の「面子」の概念に焦点を当てて比較分析を行ったが、せいぜい既存の調査結果を引用して分析する程度で、独自の調査は行っていない。さらに、異文化適応における「面子」の機能にはまだ触れていないので、今後の課題としたいと考えている。

<注>

- (1) Wikipedia 「五倫」(最終閲覧日:2023年7月20日)  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%94%E5%80%AB>
- (2) 面如桃花(桃の花のような顔)とは、「桃の木の花を照り映える少女の顔」の略で、若々しい美しさの意味である。
- (3) 白面書生(顔が白い書生)とは、年若で経験に乏しい青年である。

<参考引用文献>

魯迅,2005,「馬上支日記」,『魯迅全集』第三卷,人民

- 文学出版社,pp.339-359.
- 魯迅,2005,「説‘面子’」,『魯迅全集』第六卷,人民文学出版社,pp.130-133.
- 林語堂,1994,『中国人』,学林出版社,pp.199-206.
- Arthur Smith,2009,『中国人的性情』,长征出版社,pp.7-9.
- 翟学偉,2011,『中国人的臉面觀—形式主義的心理動因与社会表徵』,北京大学出版社.
- 翟学偉,2013,『人情、面子与權力的再生産』,北京大学出版社.
- 胡先晋,1944,「中国人的臉面觀」,『中国社会心理学レビューVol.2』,2006,翟学偉(特約編集者),社会科学文献出版社, pp.1-17.
- Goffman,1955, 'On face-work: an analysis of ritual elements in social interaction', *Psychiatry: Journal for the Study of Interpersonal Processes*,18, pp.213-231.
- 金耀基,1988,「‘面’‘耻’与中国人行為之分析」,『中国社会心理学レビューVol.2』,2006,翟学偉(特約編集者),社会科学文献出版社, pp.48-64.
- 何友晖,1974,「論面子」,『中国社会心理学レビューVol.2』,2006,翟学偉(特約編集者),社会科学文献出版社, pp.18-33.
- 成中英,1986,「臉面觀念及其儒学根源」,『中国社会心理学レビューVol.2』,2006,翟学偉(特約編集者),社会科学文献出版社, pp.34-47.
- 翟学偉,1995,「中国人臉面觀的同質性和异質性」,『中国社会心理学レビューVol.2』,2006,翟学偉(特約編集者),社会科学文献出版社, pp.217-228.
- 中西雅之,2005,「日本人の顔」, pp.34-41. <http://www.unamajiri.com/temp/nihonjinnokao.pdf>, (最終確認日:2023年7月20日)
- 林萍萍,2017,「面子的概念についての日中比較—日中大学生の調査をもとに一」,『次世代人文社会研究』第13号, pp.201-216.
- Zan Helin, 2019,「日中の「面子」という語義の異同に関する調査」,『日本語教育方法研究会誌』,25卷,2号, pp.62-63.